

横浜開港と佐久間象山

—その論理と行動—

坂本 保富

はじめに

I. ペリー来航による鎖国から開国への歴史的な

転換

II. 再度のペリー来航と象山の横浜開港の主張

III. 門人吉田松陰の黒船密航事件の先駆性

おわりに

はじめに

幕末動乱の時代を生きた時代の先駆者として、歴史的な評価を受けてきた佐久間象山（一八一二—一八六四）。実は、彼は、横浜開港の恩人でもあり、横浜市内の野毛山公園内に、市民の報恩感謝の思いを刻んだ彼の記念碑が建っている。開港当時の横浜は、人口六百人の半農半漁の寒村であった。が、今や人口三百七十万人を超える日本第一の国際海洋都市に発展した。ペリー来航による日米和親条約の締結に際して、当時、象山は、誰もが思い浮かばない横浜の開港を真っ先に提唱し、その実現に奔走したのである。

横浜開港に象徴される開国進取の思想家であった彼は、鎖国から開国へという日本歴史上の大きな時代の転換に深く関わり、勝海舟(一八三三—一八九九)・吉田松陰(一八三〇—一八五九)・小林虎三郎(一八二八—一八七七)、さらには西村茂樹(一八二八—一九〇三)・加藤弘之(一八三六—一九一六)・津田真道(一八一九—一九〇三)など、数多の門人たちを総動員して開国進取の実現に挺身し、大きな歴史的役割を担った先駆的な人物である。

鎖国から開国に至るまでの二〇〇年を超える歲月の流れは、実に長かった。だが、異国の船や人の出入りを禁止する鎖国体制の構築にも三〇年近くの長い時間を要したのである。それは、家康(一五四二—一六一六)の亡き後、徳川幕府の第二代將軍秀忠(一五七九—一六三三)の時代にはじまり、それを完結させる決定的な契機となった事件が、第三代將軍家光(一六〇四—一六五二)の治世の寛永年間、幕府のキリシタン弾圧に対する未曾有の反乱、島原・天草の乱が勃発したことである。その内乱は、寛永十四年(一六三七)十月に起こり、翌年の二月には鎮圧された。が、この反乱は、幕府に大きな衝撃を与え、「鎖国」という日本の外交政策の徹底に至らしめた。

実は、この内乱以前の秀忠の治世から、幕府は、鎖国体制を進めるべく、キリスト教の布教禁止と貿易統制に着手していた。早くも慶長十七年(一六一二)には、キリスト教の禁止と貿易統制を目的に、宣教師を追放する鎖国政策をはじめていた。以来、鎖国政策を徐々に積み重ねていき、ついに寛永十年(一六三三)には奉書船(將軍発給の朱印状と老中連署の貿易許可書を有する船舶。筆者注、以下同様)以外の渡航禁止と海外居留五年以上の日本人の帰国禁止(第一次鎖国令)、翌年には前年発令の鎖国令の徹底と長崎出島の建設開始(第二次鎖国令)、さらにその翌年の寛永十二年(一六三五)には中国・オランダ・朝鮮などの外国船入港を長崎に限定し、日本人の東南アジア方面への渡航禁止及び日本人の帰国禁止とした(第三次鎖国令)。そして、寛永十三年(一六三六)には、貿易に関係のないポルトガル人とその家族をマカオへ追放し、残りのポルトガル人を長崎出島に移した(第四次鎖国令)。そして鎖国政策の仕上げとなつ

た五度目の鎖国令が、島原の乱の後の寛永十六年（一六三九）に発令されたポルトガル船の入港禁止の措置（第五次鎖国令）であった。

以来、嘉永六年（一八五三）のペリー米艦隊の浦賀来航を受けて、翌年に日米和親条約を締結するまで、実に二〇〇年以上の長きに亘って日本は鎖国体制を遵守し、戦争なき平和社会を保ったのである。鎖国政策にはメリットとデメリットの両面があるが、戦争なき平和社会を長期に亘り担保したことは評価されて然るべき点である。

ところが、米国大統領の国書を携えて来日したペリー提督 (Matthew Calbraith Perry, 一七九四—一八五八) は、日米和親条約を締結して日本に開国を求め、寄港地の開港と居留地の提供を求めた。攘夷派が大勢を占める幕府当局は、当初、条約の締結に反対した。だが、強大な軍事力を背景とする英米や独露の東アジア諸国への武力侵攻を眼前にして畏怖し、米国の要求を拒否することはできず、やむなく鎖国から開国に転じ、交易の窓口となる港の開港と居留地の提供に応じることに政策転換するのである。

実は、ペリー艦隊が浦賀に来航する十年以上も前のアヘン戦争当時から、海国日本の脆弱な国防体制に強い危機感を抱き、海国防衛の近代化（西洋化）を幕府に建言していたのが、佐久間象山であった。当時の彼は、すでに三十代半ばにして天下に著名な儒学者であった。が、兵学者でもある彼は、「彼を知りて己を知らば、百戦して殆うからず¹⁾」を信条とし、偏見なく西洋の実態を知るべく、アヘン戦争を機に蘭語学の学習を文法の初歩から初め、不眠不休の末に蘭語原書の読解力を修得する。以後、彼は、海国防衛（海防）のための軍事科学（西洋砲術・西洋兵学）の研究を中心に、西洋近代科学の全般に関する最新の知識技術を獲得していく。そして、東洋の伝統的な儒教各派の中にあつて、「格物窮理」（物に格りて理を窮む）を基本原理とする真理探究の朱子学を、最も普遍的な合理主義の学問と理解して、東西両洋の学問世界における真理探究を共通性という観点で捉え、開国進取による積極的な洋学受容を説く、日本近

代化の思想「東洋道德・西洋芸術(西洋科学)」を形成し、それを各方面に具現化していったのである¹⁾。

以下の本稿は、叙上のような幕末期の思想理解の下に開国進取を躬行実践する佐久間象山が、嘉永六年(一八五三)六月のペリー来航から翌年三月の日米和親条約を経て、安政五年(一八五八)六月の日米修好通商条約の締結に至る、日本の鎖国から開国への歴史的な転換期に、はたして、どのような思想と行動を展開したのか。そして、何故に彼は、攘夷運動が昂揚する幕末動乱の物騒な時代状況の下で、ペリー来航以前からの持論である開国論を主張したのか。特に日米和親条約の締結に際しては、幕府の下田開港に反対して横浜開港を強力に主張し、その実現に奔走したのは何故であったのか。そのような開国和親・横浜開港による海国日本の防衛と交易の実現に、決死の覚悟で臨んだ象山の思想と行動の内実とその歴史的意義を、象山史料その他の関係史料の詳細な分析を通して闡明することが本稿の研究課題である。

I. ペリー来航による鎖国から開国への歴史的な転換

黒船来航―ペリー米艦隊の来日と条約締結

二〇〇年を超える平和な鎖国日本の江戸時代。その日本に開国を迫り、「力は正義」という弱肉強食の論理が横行する新世界に日本を参入させたのは、米国東インド艦隊司令官のペリー率いる黒船四艘の浦賀来航であった。覇権主義(hegemonism)が支配する当時の道德なき世界状況の中で、海国日本の平和防衛線であった鎖国という防禦壁は、いとも簡単に外側からこじ開けられた。だが、ペリー米艦隊の日本への来航は、決して偶然でも突然でもなかった。すでに前年の嘉永五年(一八五二)八月には、オランダ政府や琉球王国から欧米異国船の日本航行の情報が寄せられて、

幕府諸大名の予知する出来事であつたのである。

米国にとつて、西海岸のカリフォルニアから太平洋を渡つて中国に往來する通商貿易の航路を開拓するには、薪水や食糧を供給する寄港地が不可欠であつた。東アジア貿易の新規拡大を願う貿易商人や南氷洋を漁場とする捕鯨業者などが、寄港に最適の候補地として早くから刮目していたのが東アジアの海国日本であつた。嘉永三年(一八五〇)七月、第十三代大統領に就任したミラード・フィルモア(Millard Fillmore、一八〇〇—一八七四)は、その翌年、日本にアメリカ東インド艦隊司令長官を全權使節として派遣し条約を締結させることを決定する。全權を委任される艦隊の司令長官の人選には曲折があつたが、結局、一八五二年十一月に東インド艦隊司令長官に就任したばかりのペリー提督(Commodore、代将)が選任された。この情報は、オランダ国王からの警告書簡として直ちに長崎のオランダ商館長を経て日本の徳川幕府に伝達された。

その結果、幕府が、ペリー提督が持参する大統領国書を受け取るべきかを論議している間の嘉永五年(一八五二)十月、ペリー艦隊は日本に向けアメリカを出航する。同艦隊が、大西洋ルートでインド洋を渡り、シンガポール、香港を経て、琉球の那覇に來航するのは翌年の嘉永六年(一八五三)四月であつた。そして同艦が、日本の浦賀に來航するのが同年六月三日のことである。

ペリー提督は、浦賀から江戸湾の内海に進んで横濱の本牧辺りまで入港し、早速に日本側役人の制止を振り切つて内海の測量(海底の深淺や長短の測量)を行う。やつと六月九日になつて、ペリー一行は幕府指定の久里浜に上陸し、同邸接所で主席全權の浦賀奉行・戸田氏栄(一七九九—一八五八、旗本)と次席全權の同じく浦賀奉行・井戸弘道(生年不詳—一八五五、旗本)が幕府代表として大統領国書を受け取つた。そして、国書に対する日本側の返書は、日本の国法に従つて長崎で渡す旨の通知をする。が、これに対してアメリカ側は、長崎での返書の受け取りを拒否し、半

年以内に再度、浦賀に来航する旨を告げ、同年の六月十二日、再び那覇に向かつて出港する。

急ぎ那覇に引き返したのは、日本に先駆けて同年六月十七日に琉球王国と琉米修好条約を締結するためであった。

予定通り、琉球王国との条約を締結したペリー一行は、南方の重要な寄港地として那覇の港を開港させたのである。

それにしても、嘉永六年（一八五三）六月三日、突如として巨大な黒い軍艦四艘（蒸気船二艘と帆船二艘）が、江戸湾への入口である伊豆半島の突端である浦賀沖に来航すると、当初は、その異様な光景は幕府関係者や見物人たちに言い知れぬ不安と恐怖をかき立てた。

この黒船来航という情報を、いち早く捉えて反応した日本人の一人が、佐久間象山であった。当時、象山は、江戸に私塾を開き、著名な西洋砲術家として多くの門人を抱え全国にその名を轟かせていた。幕府関係の知人を通じてか、彼は、ペリー艦隊が六月に渡来する四ヶ月前の同年二月十八日には、同艦隊の浦賀来航の情報を察知していた。それ故に象山は、なおも旧式の和流砲術にこだわり洋式砲術に目覚めない当時の兵学者輩の多いこと、大砲を運搬する馬の訓練をしていないこと、配置されている台場は無用な旧物であること、そして洋式軍艦を持たないこと、等々、時代遅れの防衛体制の欠陥を、来日するであろう巨大な近代的科学兵器を装備した異国艦隊に関する西洋知識と比較検討の結果から判断して、次のように指摘していた。

当年（嘉永六年）は四月の頃、異国船浦賀沖辺渡来候べき風聞にて御座候ものは、随分疾首（心配、筆者注、以下同様）候儀に候所、時勢をも弁へず、此節に至り候ても洋法を兼ね取る事を知らぬ兵家者流、いづ方にも沢山之有よしにて浩嘆（大いに嘆く）の至りに候。大砲を用ひ候にも馬までも慣し不申候ては西洋の通軽（身軽）の働き出来不申、海城を守り候に台場のみにては何分届きかね候事にて、是非かれの用ひ候船無之候

ては参らむ事御座候。⁽⁶⁾

実は、前述のごとく、すでに前年の嘉永五年（一八五二）にはオランダ国王からアヘン戦争の経緯を含めた米艦の日本来航を予告する情報（阿蘭陀本国よりの忠告）があり、少なくとも嘉永五年の年内には、ペリー艦隊が来航すること、を長崎奉行はもちろん幕府関係者は予知しており、その風聞が江戸市中にも広がっていたのである。⁽⁷⁾

前述の象山史料は、日本が備える和流大砲では台場から米艦隊には届かず、米国やロシアなどの諸外国船の来航を前にして、なおも洋式大砲の必要性を認めない旧態依然とした兵学者が多数を占める時代遅れの国防体制に対する、象山の怒りと嘆きを表明したものであった。

嘉永六年の黒船来航当時の象山は、江戸の木挽町（現在の東京都中央区銀座六丁目）に軍事科学系の洋学私塾を開き、西洋砲術・西洋兵学に関する本格的な西洋最新の知識技術を、幕臣や五〇を超える全国諸藩から入門してくる数百人もの門人に教授するほどの盛況を極め、本来は当時の日本を代表する朱子学者である象山の名は、西洋砲術・西洋兵学を専門とする軍事科学系の洋学者として全国に轟いていた。象山は、米国の軍艦が日本に来航した場合の争乱に備えるべく、早々に食糧の備蓄や陣服の新調、佩刀^{はいとう}（帯刀）の修復などを念入りに準備していた。黒船来航の一ヶ月前の嘉永六年五月十日の書簡には、当時の緊迫した様子が次のように記されていた。

昨年来、風説に因り蕃船渡来の儀を心遣ひ、少しは米などをも買備^{たななわ}へ夏の陣服など製し候儀を伝聞仕、只今にも争乱の出で来り候様只願心得候（中略）身の廻り佩刀^{はいとう}の修復等も仕度存入候。⁽⁸⁾

ペリー来航と象山の対応

上記の象山史料により、米国艦隊が渡来して争乱が起きるといふ物騒な風聞は、大名諸侯の武家はもちろん、一般庶民の間にも広く流布していたことがわかる。それ故、江戸に一家を構える象山も、まずは家族と門人を守り、そして武士としての本分をはたす準備に取り掛かっていたのである。

しかも、米艦が来航する前年の嘉永五年（一八五二）は、象山が東西両洋の学問を兼修し、東洋の易学理論から西洋科学（西洋芸術）の結晶である洋式銃砲のメカニズムを解明した漢文の著書『礮卦』（はうけ）（『砲卦』）を脱稿した年であった。同書は、誠に時宜を得た象山自信の砲学研究書であった。だが、幕府の刊行許可が得られず、また易学の難解な理論を駆使した漢文の書であったが故に、門人たちによる手書きの書写版を作成し、江戸の恩師である佐藤一斎や松代藩の恩師など、少数の関係者に配られただけで、広く一般に普及することはなかった。

自信作の著書が世に知られず、失意のどん底にあった嘉永六年（一八五三）六月三日、象山の予言通り、黒船が来航する。そして、黒船に対する象山の対応は敏速であった。翌日の六月四日の早朝には、江戸の自宅を発ち大森を経て金沢に行き、そこから船を借り受けて浦賀に到着し、山を登って米国艦隊を具に観察した。その間の様子を、六月四日付の母親宛の書簡に次のように記している。

昨晚四時すぎ浦賀までちやく致し候ま、御安心願上候。今朝はやく起き候て山に登り渡来の船ども一見候所、かねてき、候通大そうなるものに御座候。つがふ四そうの所二そうはじょう気せんと申にて、火の力にて風にかかひ候てもさしつかひなく走り候船に御座候。

明けて六月五日の早朝、象山は東浦賀から山に登り鴨居という所の東に向かつて米國艦隊の様子を観察し、浦賀港から艦船までの距離、艦船の大小と装備した大砲の数、国旗である星条旗の図柄などを望遠鏡（遠鏡）で丹念に観察し記録する。そして同日の夜、江戸に駆け戻った象山は、すぐさま松代藩の定府家老である望月主水に米國艦隊の観察結果を得意の数字をあげて報告していた¹⁰。

また、同書翰には、巨大な米國軍艦が入港した浦賀の人々が争乱を恐れ、家財をまとめて避難するなどの騒然たる様子も、「浦賀商家にても銘々逃任度いたし長持様のもの其外家財持運び候」と記されている。

米國の四艘の軍艦は二艘が蒸気船（フリゲート）で残る二艘が帆船（コルベット）であった。象山は、それら各艦を実際に現地で見分して目測し、最も大きな軍艦は全長四十五メートルを超え、大砲二十八門を備えた蒸気船であると捉えた。そして、それら四艘の乗組兵員の総数が何と二千人。米國艦隊は、強力な武器を装備し多数の軍人を乗せた巨大な大部隊である、と在府家老の望月に報告している¹¹。浦賀沖に浮かぶ巨大な四艘の軍艦は、当時の日本人にとって未曾有の恐怖であった。象山は、都下の騒擾たる様子、幕府から横浜、応接所の警備を任された松代藩の軍議役（総勢四百余名の藩兵員の隊伍編成・洋式銃隊訓練などの指揮官）を拝命したこと、そして異國船の来航に備えた警備の最重要拠点は御殿山であるべきこと、等々、私見を交えて親友で郡奉行の山寺源大夫（常山、一八〇七—一八七八）に宛てた書簡で次のように報告している。

僅か四艘の船に候所、都下の騒擾大方ならず（傍線は筆者による。以下同様）。諸侯方にも多分の御出費相立候事と奉存候。誠に残念なる事にて御座候。是にて世上の夢も覚め候かと存じ候に、中々左様参らず、益々昏乱し候（中略）小弟に軍議役と申を被仰大小銃の差引をば御任御座候（中略）御府内に尤も近く候て大砲を用ふ

べき所を撰ぶの外無御座候。かねて御府内に最近くして差当り大砲を備へ可申場所、御殿山近辺が然るべきと相考へ、異船乗入候節先その衝く所に当り候と雖も却て防ぐに便よく候。

なお、日本側の現地交渉の担当者である浦賀奉行所与力の中島三郎助(一八二二—一八六九)やオランダ通詞の堀達之助(一八三二—一八九四)が、異国船渡来の場合の慣例通り米國艦船の見分に乗船しようとしたとき、これを米國側は拒み、空砲を鳴らして恫喝し追い返した。象山は、この米國側の傲慢無礼な言動に象徴される道徳面での数々の無礼を問題とした。このことを、翌々日の六月六日、米艦觀察の結果を踏まえて、象山は、松代藩の定府家老である望月宛の書簡で、米國艦隊の強圧的な言動を含めた反道徳的な態度の問題を、次のように報告している。

是迄渡来の船と総て品替り候て乗組居候者共も殊の外傲慢の体にて、是までは異船渡来の度ごと与力同心乗入見分する事旧例に候処、此度同心与力の類の身分軽きもの一切登る事を許さず、奉行に候はゞ登せ可申との事にて、その船の側へ参り候をも手まねにて去らしめ候由、夫を強て近寄り候へば鉄砲を出し打ち放し候べき勢に御座候故、一番船に向ひ候与力は其促引返し、また彦根候御人数の内にも乗寄せ強て登らんと致し候所、空砲には可有之候ども二発打出し候に付、是も無致し方且は恐れ候て引返し候由の語に御座候。

ペリー艦隊の米國一行は、象山門人である浦賀奉行所与力の中島三郎助による日本側と米國側との交渉条件(交渉相手や交渉場所など)の折衝の末に、嘉永六年六月九日、幕府側が設置した横浜応接所で、日本側を代表する浦賀奉行の井戸弘道が、米國フィモア大統領の国書(U.S. President Fillmore's letter to the Emperor of Japan, presented by

Commodore Perry on July 14, 1853)を受け取る運びとなった。ここに日本の歴史上で初めて、「横浜」という地名が日米間の条約締結に関わって正式に登場することになるのである。

はたしてペリー提督が、艦隊を率いて大統領国書を携え、日本に来航した目的とは、何であったのか。老中首座の阿部正弘(一八一九—一八五七・備後国福山藩第七代藩主)は、一旦は、幕府海防参与で攘夷派の象徴であった前水戸藩主の徳川斉昭(一八〇〇—一八六〇、第十五代將軍徳川慶喜の実父)に相談して、国書の受け取り拒否を決定する。

だが、強大な米國艦隊との争乱を恐れた幕府は、アヘン戦争(一八四〇—一八四二)やアロー戦争(一八五六—一八六〇)で英国に惨敗した中国の惨状を想起し、幕府の交渉役として浦賀奉行の戸田氏栄と井戸弘道に全権を委ね、嘉永六年六月九日、ペリーから開国を促す米國大統領の国書を受領したのである。国書に書かれた米國側の要求は、次の三点に要約することができる。¹⁵⁾

- 一、日本の島々に座礁あるいは悪天候で避難したアメリカ船の水夫と彼らの資産の保護
- 二、アメリカ船に食糧・水・燃料を与え、被災した船舶の修理のための入港の保証
- 三、アメリカ船舶が荷物の売買や物々交換などをする日本との交易関係の締結の要求

漢語と蘭語の二種類の訳文を受け取った幕府は、それぞれを日本語に翻訳させた。中国語版を和訳したのは林壮軒すなわち林大学頭(復斎、一八〇一—一八五九、林大学頭家十一代当主)。オランダ語版を和訳したのは天文方手附の杉田成卿(二八一七—一八五九、杉田玄白の孫、幕府蕃書調所教授)と箕作阮甫(一七九九—一八六三、津山藩主、幕府天文台翻訳員)であった。

要するに米国が日本に要求したのは「開国」による「交易」と「開港」であった。幕府は、将軍が病気で決定できないとの理由をあげて、国書に対する返答の一年猶予を要求した。ペリー側もこれを受け入れ、明年、再来日することを告げて、嘉永六年（一八五三）六月十二日、江戸湾を離れ、琉球に戻っていったのである。

象山は、ペリー艦隊の来航時には、幕府から沿岸警備を命じられた松代藩の軍議役を仰せつかっていた。だが、このときの彼は、すでに形成し実践していた「東洋道德・西洋芸術」という東西文化の比較思想の観点から、十数年前のアヘン戦争時に予言していた異国船の来航が的中したことを確認して自信を深め、米国ペリー艦隊の日本来航の意味を分析した。特に米国側の否定的な面として象山が問題としたのは、前述のごとく日本の国禁を犯して一方的に来日し、強硬な外交姿勢と横暴な振る舞い、しかも無断で江戸湾の測量を実施したことなど、国家間の外交上ではあるまじき道徳的非礼の振る舞いであった。

「東洋道德」の観点からペリー一行の言動を批判

特に象山が重視した問題は、米艦が浦賀に到着直後の六月九日から、日本の国禁を犯して勝手に浦賀沖から金沢沖（横浜市）や本牧（横浜市南東部など東京湾岸地域の湾内深くにまで侵入し、江戸湾の測量を行ったことである。日本側の交渉役である浦賀奉行所与力の香山栄左衛門（二八二—一八七七）は、半島の突端の浦賀から内海に入ることは国禁であると嚴重に抗議したが、米国側は巨大な米艦が入港し停泊できる港を探索するために必要な測量であると同答し、測量を中断することはなかった¹⁶。

象山は、わが国の国禁を破り国体を侮辱するアメリカ軍人たちの横暴な態度を、国家道德の観点から問題としたのである。交渉に当たった日本側の浦賀奉行の戸田氏栄、井戸弘道の両人は、米国人の傲岸不遜な態度に対する怒りを

抑えきれず、米艦が浦賀を去った後、ペリー提督の肖像画を小刀で寸断したという。このことを、象山は次のように諫めている。

去夏墨慮は兵艦四艘を以て、その国書を護送して、浦賀の抵に澳れり。その挙動詞氣、殊に悖満（傲慢）を極め、国体を恥むること細ならずして、聞く者切齒せざるはなかりき。時に某人（筆者注…浦賀奉行の戸田氏栄、井戸弘道）は浦賀を鎮せしが、氣を屏けて負屈して、遂に能く為すことなく、虜の退きて後、自ら小刀を抽きて、その遣りし所の虜主（ペリー提督）の画像を寸断して以て怒りを洩しぬ。

怒りの余りに浦賀奉行が冷静さを失い、ペリーの肖像画を切り裂いてしまった。この感情的行為を、象山は、中国の故事を引いて軽率不益な行動であったと戒めたのである。その訳は、その一枚の肖像画が、ペリー提督の知恵の深淺や凶り事の長短など指導者としての能力の有無を判断し、後事の備えをなすための貴重な人相分析の史料となりえたからであると言う。古来、東洋では仏教や儒教を問わず、長年に亘る人間観察の歴史的経験を理論的に体系化した人相学が成立しており、目・鼻・耳・口・髪などの顔面の部位の特徴から人間を分析し理解する手法が一般化し、易学者である象山もまた人相学に精通していたのである。それ故に、ペリー提督の人相学的な性格特性の分析に興味があり、彼の肖像画の資料的価値を問題にしたものと思われる。いかにも象山らしい事実分析と問題提起である。

米艦が日本側の制止を振り切つて湾内に侵入し江戸湾測量を強行した非礼の失態を踏まえて、東西の兵学に精通した象山は、外国軍艦の江戸湾侵入に対する防禦と攻撃の両面から最適の場所として御殿山（現在の東京都品川区北品川にある高輪台地の最南端に位置する高台）を特定し、同所を最重要の防衛拠点として嚴重に警備すべきことを家老

の望月に説き、その旨を第九代松代藩主の真田幸教（一八三六一—一八六九）の名をもって老中の阿部正弘（一八一九—一八五七）、福山藩第七代藩主、老中首座で海防掛を設置と牧野忠雅（一七九九—一八五八）、長岡藩第十代藩主、老中（海防掛）宛に「上書」（文聡公より御殿山警衛を命ぜられんことを幕府に請う書）¹⁸という上書の草稿を添えて、訴えたのである。

象山は、米国の軍艦を実際に浦賀の現地に向いて観察し、四艘の黒船を目測して各艦の大きさを数字で捉えた。例えば、最大のフリゲート艦である旗艦サスケハナ号については、遠方から望遠鏡で捉えたので、実際の数字は異なっていたが、最大のコルベット（軍艦）は全長四十五メートル（実際は七三・八メートル）を超える巨艦で、大砲も二十八門（同八門、別の砲艦の場合は二〇数門）を備えた蒸気船であると捉えた。しかも、四艘で乗組兵員の総数が二千人（同一五〇〇人）という米国艦隊は、強力な近代的武器を装備した巨大な軍艦の大部隊である、と象山は捉えたのである。²⁰アヘン戦争以後、西洋砲術や西洋兵学、大砲や軍艦などを詳細に研究してきた象山には、浦賀沖に浮かぶ巨大な四艘の軍艦の威力を具に推察することができた。が、その威力は象山の想像を絶する強大なもので、旧態依然とした日本の防衛力を考えたとき、とても太刀打ちできない非常な脅威と実感したのである。

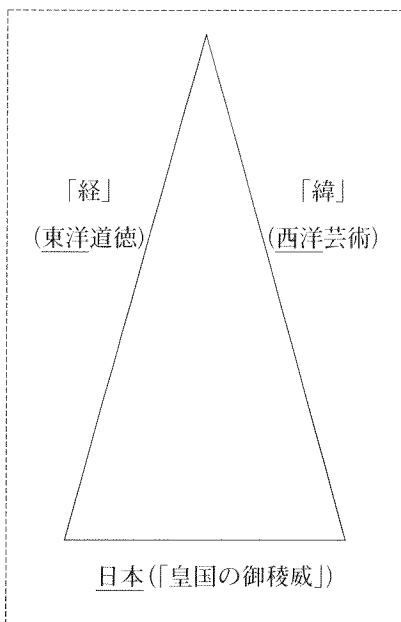
異国船の来航を早くから予見していた象山は、極めて冷静に受けとめ、米国艦隊の実像を自分の眼で見極め、旗艦サスケハナ号を初めとする巨大な米国軍艦を数値で目測して理解し表現したのである。その結果、象山が着眼したことは、巨大な軍艦や大砲などの近代兵器を製造する欧米諸国の高度の科学技術力であった。これを日本に導入し、後進国であったアメリカやロシアがオランダやイギリスに学んで富国強兵を成し遂げたごとく、日本もまた欧米に学ぶべきこと、それこそが真の攘夷であると考え、中津藩の門人に次のように述べている。

ロシアの先王ペートルが和蘭人を師として遂に和蘭に劣らず、北アメリカ人英吉利を師として終に英吉利に勝ち候類は御承知無之候義や。兎に角に彼愚意には夷の術を以て夷を防ぐより外無之と存じ候。彼れに大艦あらば我も亦大艦を作るべし、彼に巨砲あらば我も亦巨砲を造るべし。総てかの黄帝を師とし候に若くなしと存じ申候。

象山は、米艦隊の日本渡来を具にみて、これを武力で排除すべしと昂揚する単純な攘夷思想には与せず、黒船来航の現実を西洋文明の長短得失から現実的に捉え、「東洋道德・西洋芸術」思想の視座から、否定と肯定、恐怖と希望の両面から冷静に分析した。その結果、巨大な黒船に象徴される軍事科学をはじめとして、欧米先進諸国の近代的な科学技術を、日本に積極的に摂取することが真の攘夷であることを、「夷の術を以て夷を防ぐ」ことであるとして、幕府や藩当局、そして全国諸藩の門人たちに説いたのである。

次の史料は、黒船来航の前年十月に、洋式砲術の導入や海岸警備の強化に取り組んでいた庄内藩第九代藩主の酒井忠発（一八一二—一八七六）から、招聘したいと関心を抱く象山の学歴や職歴に関する問い合わせが松代藩にあった際の、蟄居中の象山の草稿と思われる返書の一節である。その核心は、すでに象山が形成し実践していた「東洋道德・西洋芸術」という思想世界の内実であった。

彼(象山)の横文字を自由に読み覚え候て、天地万物の窮理よりして火術兵法等に涉り、只今にては漢土聖賢の道德仁義の教を以て是が経とし西洋芸術諸科の学を以て是が緯とし、唯願皇国の御稜威(御威光)を盛に致し度と申存念のよしに御座候。(中略)火術門人兵学門人員数の事、是は取り合わせ三百人も御座候。(中略)彼が本業と仕候経学の事は不存人多く、結局一個の砲術家の様に世間には申候。



東洋の人間や国家の在り方に関する人倫道德の優越性(経)と西洋の精巧緻密な科学技術の先進性(緯)、それら東洋と西洋の両者を両翼として、日本という国家の独立安寧(皇国の御稜威)を保持・発展させるべきである。そのためは、開国進取して西洋の科学技術を積極的に受容し、国家の防衛体制の革新をはじめ日本の文明開化を推進する必要がある。これが、象山の「東洋道德・西洋芸術」思想に基づく黒船来航の危機に対する対応策の基本であった。

叙上のような象山の「東洋道德・西洋芸術」思想における西洋・東洋・日本の三者の相関図を、簡潔に図示すると上記のようになる。単に「東洋道德」あるいは「西洋芸術」に依存する外来文明の日本化ではなく、あくまでも日本自体の独立安寧が目的であり、それ故に日本の側に「東洋道德」(中国文化)や「西洋芸術」(欧米文化)を取捨選択する絶対的な主体性が担保されることの重要性が主張される、と言うところに特徴がある。また、日本を東洋や西洋に

優越する特別な国家・人民であるとする神国主義・攘夷主義の排他的な思想でもないのである。あくまでも東洋と西洋を両翼として日本が世界に飛翔することが、象山の「東洋道德・西洋芸術」思想の本質的な意味なのである。

Ⅱ. 再度のペリー来航と象山の横濱開港の主張

象山は横濱警護の松代藩指揮官―「軍議役」

ペリー提督は、約束通り翌年の嘉永七年（一八五四）一月十四日、今度は七艘（蒸気船三艘を含む七艘の艦隊、後に二艘が加わり総艦数は九艘）もの巨大な軍艦を率いて、前回と同様に旗艦サスケハナ号（USS Susquehanna）に搭乗して日本に来航した。艦隊は、今回は同じ三浦半島でも浦賀沖とは反対側の相模湾入口の長井村沖（現在の横須賀市）に停泊した²³。またしても、日本の国禁を破り、江戸湾の内海に侵入し、今度は横濱沖に停泊したのである。

これに対して浦賀奉行の戸田氏栄と伊沢政義は、米国軍艦を江戸から遠ざけて浦賀湾に引き戻そうと必死に交渉した。が、米国側は「浦賀では数艘の軍艦が停泊するには波が高く困難」であるとの理由で応じなかつた²⁴。

尊皇攘夷が昂揚する国内状況を受けて、幕府側は、米国側が要求する「通商条約」には最初は反対であった。だが、米国艦隊の偉容に驚き、何としても中国のような敗北必至の戦争は回避すべく、最終的には米国側との和親条約の協議を受け入れ、調印の場所を浦賀に指定した。米国側も、これに応じて、一月二十五日、軍艦を浦賀沖に移して停船させ、米国側の折衝担当のアダムス（H. A. Adams）中佐一行が浦賀に上陸したのである。

象山も、嘉永七年（一八五四）一月十一日の書簡に「亜米利加船八艘浦賀に向ひ候趣風聞御座候²⁵」と記し、再度、米艦が来航する三日前に情報を察知していた。米国艦隊の来航を知ると、幕府は、応接所を横濱海岸に設け、その警衛

を松代藩と小倉藩に命じたのである。早速、松代藩は、江戸家老の望月主水を総督に、そして象山を再び軍議役(海防人数臨時出役)に任じて、洋式大砲など本格的な最新武装を準備した。だが、松代藩とは対照的に、小倉藩は、いまだ旧式の火繩銃であった。

朱子学の格物窮理を躬行実践する現場主義の象山は、先ずは軍艦偵察のために、二月七日に江戸の自邸を発つて品川・生麦・神奈川を経て横浜に向かった。途中の生麦まで行くと、「海上二十町ばかりも隔り候はんとおぼしき所に異国船八そういかりをおろし居候」と、居並ぶ軍艦の偉容がみえた。また、一般庶民は、再度の来航に慣れたのか、「加奈川宿の手前の松原には茶屋など出し、船見物のものども群集いたし居候(中略)わざわざ人の江戸より見に参り候」と、巨大な米國艦隊を見に江戸からも見物人が駆けつける始末で、茶屋なども出るほどの賑わいであることに象山は驚いた。前回の来航時とは全く異なる好奇心に満ちた庶民の黒船対応の様子を、象山は、早速、江戸のお順夫人に報告している。

なお、江戸日本橋を発してから最初の品川宿を過ぎて三つめが神奈川宿で、その先に隣接する当時の横浜があった。象山が「鰯獵(漁)の御座候所故に村立も宜く見え候」と記すほど、横浜村は東海道からそれて海岸に面した半農半漁の寒村であった。その横浜に、日本側の主張する日米条約交渉の応接所が設けられたのである。

交渉は二月十日から横浜の応接所で開始され、ペリーは最初に全二十五条からなる条約の草案を提起した⁽²⁶⁾。だが、これに日本側が反対し、その後、幾度も両者間で協議を重ねて修正が加えられた。やつと同年三月三日に至って合意に達し、日本側全権の林復斎(二八〇—一八五九、林大学頭家十一代当主)とアメリカ側全権のペリー提督との間で、全十二条からなる日米和親条約(神奈川条約)が、横浜村で締結されるに至った。その内容の中心は、下田と函館の開港であり、このことが日本が鎖国から開国に国家体制が転じる歴史的な転換点となるのである⁽²⁷⁾。

なお、松代藩軍役として再度の横濱駐在の経験によって、象山は、横濱の地理的な特徴や村人の生活などを実地に検分して地政学的な価値を認識し、日本の開国進取の窓口としての横濱の有意性を認識するところとなった。

下田開港を否定し横濱開港を主張する象山の論理

和親条約の締結に至るまでには、薪水・食糧・石炭などを供給する港の開港問題で日米の意見が対立した。日本側は、当初、遠方の琉球と辺境の松前を非とし、長崎だけを是とした。だが、ペリー提督は、日本側の提案を否定し、中国広東への航路上にある「琉球」の他に、「(神奈川を含めて)日本の東南で五ヶ所から六ヶ所、北海で二ヶ所から三ヶ所」の開港を要求した。⁽²⁸⁾ その後の交渉過程で、具体的な開港場として琉球・神奈川・松前・那覇などの地名が候補にあがった。結局、日本側は、最終案として北方の「函館」と共に新たな開港場として南方の「下田」をあげて交渉に当たった。安政元年(一八五四)二月二十六日の交渉で、急転直下、米側も、この日本側の提案を受け入れたのである。⁽²⁹⁾

だが、象山は、この条約内容の不備を衝き、特に日本にとって喜望峰のような軍事上の要衝である下田の開港を絶対不可とし、代わって横濱開港こそが得策と主張したのである。条約締結の前に松代藩軍議役として長らく横濱に控え、横濱の軍事的・地政学的な特徴をよく理解していた象山は、下田開港の愚策に驚き、横濱開港こそが最善の策であることを理路整然と説き、横濱への開港場の変更を、幕府当局その他の関係筋に働きかけるのである。

実は、下田開港は日本側が提案したものであった。これに米側も同意して、二月二十五日には、わざわざ両国で下田港にまで出向いて、現地の実地検分も済ませて同意していたのである。だが、象山は、この動きを察知して、急遽、下田を横濱に開港の変更を求めて動くのである。まず、親交ある水戸藩の藤田東湖(一八〇六—一八五五)に書簡

を送り、下田開港の愚を説き、幕府の海防参与である徳川斉昭（一八〇〇—一八六〇）に働きかけようと、次のごとく書簡を送った。

昨夕（二月二十五日）罷還長岡藩衆に面会候へば、下田の義は兼て愚察の通、果たして江川氏より出候に相違無之と申事に候。此人一人の為には一時の功策とも可申候へども、皇国の御為には千載の失計に歸し申候（中略）彼の陸行不便の絶地なるを幸とし洋人の學術技芸をも外手にしらせず、吾手にて独り先づ学び得候はんと企候事と被察候。誠に悪むべき私計と存申候。

この下田開港の愚案は、かつての西洋砲術の恩師ではあるが、浅学非才と軽蔑する江川垣庵（一八〇一—一八五五、幕府勘定吟味役格で品川台場を築造）から提案されたものと察した象山の書簡に対して、藤田からは「下田之事建議の出所長岡より御聞被成候由」と、下田開港の建議は長岡藩主で老中海防掛として条約交渉に関わっていた牧野忠雅（一七九九—一八五八、長岡藩第十代藩主）から提示されたものではないか、との返書を受け取る。

ところで、象山は、何故に下田開港に反対し、横浜開港を最善としたのか。まず彼は、開港それ自体には大賛成であることを前提とし、その上で下田を開港することが日本にとっていかに不利益が多く問題であるかを、東西両洋の兵学に通じた象山は、当然、軍事に関わる地政学的な観点から分析し、下田開港の軍事的な欠陥を第一にあげ、次のごとく説いている。

下田は本邦の要地にして、その形勢は全世界の喜望峰に比すべし。夷虜之をか儼りて、屯駐して以て巢窟と

為さば、その害は言ふべからず。且つ大城は江戸に在りて、人口衆多なり。米穀布帛は皆海運に資れり。不幸にして警ありて、回路格塞せば、江戸は首としてその禍を受けん。

伊豆の州たるや、天城の嶮、その中を隔絶して、下田はその南端に在り。一旦変起らば、陸路に兵を出すも、砲隊は嶮の沮む所となりて、以て行くべからず。海路には則ち我に堅艦なし。他日たとひ造作するを得とも、虜には海陸の形勝ありて、我は反りて之を喪へば、主客は位を易へ、攻守は勢を異にせん。³²

下田を開港する反対理由の第一は、地政学的な観点からみて絶対的に日本に不利であること。そして下田は、我が国の喜望峰と言えるほどに重要な位置にあること。もし、この地を米国が借地して居留地としたならば、その弊害は言語を絶するほどに大きい。將軍の居城は江戸にあつて人口が集中し、米穀布帛などの生活物資は全て海運によって全国から江戸に運ばれている。もし、不幸にして下田に事変が起きた場合、海路は忽ち戦場と化し交通は遮断され、真つ先に江戸は災禍を受けることになる。

第二に、防禦と攻撃の兵学的な観点から日本に不利であること。伊豆の国は、険しい天城の山が半島を南北に分断する隔絶の地であり、交通の便は非常に悪い。下田は、そのように険しい地形の伊豆の南端に位置している。それ故、一度、事変が起これば、江戸から出兵しようとしても、重装備の銃砲隊は険悪な天城の地勢に沮まれて駆けつけることができない。海路も我が国には警固な洋式軍艦はなく、他日、建造できたとしても、その時には、すでに下田は開港され米国の根拠地となつており、下田の地形に慣れた米国軍は陸と海の両面で非常に有利であり、我が方は全く不利な立場に立たされる。攻め手である日本と守り手である米国の勢いが逆転してしまうことになる。よつて、我が方の形勢が地政学的にも兵学的にも全く不利となる下田は、絶対に開港すべきではない。

上記の下田開港に絶対反対の理論に続いて、今度は横浜開港のメリットを、象山は次のように説いている。

敵人に地を仮さんには、宜しく他日の計を為して、海陸に兵を進むるを得るの処を撰ぶべし。窃かに横浜の地勢を覽るに、甚だ之に称^かへり。且つ虜船をして常に此に在らしめば、江戸を去ること甚だ邇^かし。則ち人人の膽^{きま}を嘗^なめ薪に坐するの念は、自ら已む能はず。警衛守禦の方も亦自ら嚴ならざるを得ず。また、親しく彼の長ずる所を觀て、以て速に我の智巧を進むべし。これ、その利多しと為す所以なり。(中略)故に我謂へらく、横浜を以て之に仮すの愈れりとなすに如かざるなり。是れ天下の大計なり。

横浜開港の国家的な利点は、第一に軍事的観点から江戸防禦の体制を敷く上での横浜の地理的な利便性にある。敵に土地を貸与するには、後々の計を考えて陸と海の両方から進軍できる場所を選ぶべきである。横浜の地勢をみると、甚だこの条件にかなっている。しかも、敵の軍艦を横浜港に停泊させておけば、江戸は甚だ近いので、敵の動静も人々の目につきやすく、監視体制を整えやすい。攘夷の昂揚する我が方の敵愾心は抑えがたいほどに強い。それ故に、守禦の面でも自ずと嚴重な警戒体制を取らざるをえないし、それが横浜ならば可能である。

また、第二には、開国進取による西洋の科学技術を撰取できる位置にある横浜の利便性である。日本人が高度な文明を持つ異人と親しく接していけば、彼らの長所を見聞して撰取することができ、我が国の知識技術を進化させることができる。異人と市民の日常的な交流による開国進取の重要性である。この故に、断然、下田よりも横浜を開港する方が有利である。横浜を開港して米国に居留地を貸し与える。この考えは、海国日本の独立安寧を担保する将来のための国家百年の大計なのである。

以上が、象山の主張した横濱開港の論拠である。象山は、ペリー艦隊が来航するや否や浦賀の現地に分け入り、また伊豆の下田も実地に見聞している。横濱と下田を踏破した地政学的な判断をもって、下田開港を愚策と断定したのである。嘉永七年二月二十二日の夜に、下田開港の話を知った象山は、翌朝、松代藩家老で横濱警衛の松代藩総督（軍事長官）である望月主水を訪ねた。そこで彼は、藩公（松代藩第九代藩主真田幸教―第八代藩主真田幸貫の孫）に、下田開港を横濱開港に変更するよう幕府に進言すべく、藩公から幕府宛に渡す上書稿を執筆して持参し、幕府に建築するようにと、熱心に望月を説得する。しかし、象山の庇護者で名君の真田幸貫は、ペリーが初来航した嘉永六年（一八五三）に他界していなかった。幸貫の長男で嗣子たる真田幸良（一八一四―一八四四）は病弱で早世したため、その長男の幸教（幸貫は祖父で松平定信は曾祖父、一八三六―一八六九）が第九代藩主となっていた。だが、いまだ十七歳の若輩で政治的な力量や発言力に欠け、それ故に幕府への献策に躊躇して全く政治力を発揮することができなかったのである。

だが、象山は、日本の国家百年の大計から下田開港を下策とし横濱開港を上策とする信念を曲げず、幕府の老中首座として日米交渉の最高責任者の立場にあつた阿部正弘と牧野忠雅の両閣老を説得すべく、上書を認め、仲介の任を長岡藩牧野家の家臣で門人の小林虎三郎に託したのである。しかし、牧野侯は江戸遊学中の学徒の身分で天下の政道に意見をしたとの科で、即刻、虎三郎に帰郷謹慎を命じたのである。

虎三郎は、象山塾にあつては塾頭を務め、吉田松陰と双壁（象門の二虎）をなす最も優秀な門人であつた。彼こそは、儒学・洋学・和学の三学に優れ、象山思想「東洋道德・西洋芸術」の全体を継承しうる最有力の門人として、将来、国家的次元での活躍を囑望された学徒であつた。しかし、修学中の学徒が幕府の政道に意見を具申したとの理由で藩主の譴責を受け、即刻、長岡帰郷の上、蟄居閉門の処分を受ける。これによって、虎三郎は、学問大成の道を閉

ざされ、明治の夜明けの戊辰戦後における長岡復興の責任者（大参事・旧家老職）として復帰するまでの十余年間、塾居閉門の身で学究生活に精進した。その間の彼は、敬仰してやまない恩師・象山の期待に応えるべく、耐えがたい不治の難病と闘いながら、蘭書・漢書の翻訳や歴史教科書の編纂、文部省から委嘱された英米における最新の教師教育書の翻訳校訂など、文筆活動に渾身の力を注いでいたのである。³¹⁾

その虎三郎の名は、一般的には長岡藩の美談「米百俵」の主人公として有名である。しかし、彼の真骨頂は、「米百俵」の美談の後の明治四年（一八七二）に上京して以降、東京で展開した国家的な問題に関わる様々な研究活動の成果にあった。漢学や蘭学に精通した語学力・文章力を活かして、教育文化を中心に多くの翻訳書や著書を残し、日本近代化の推進に大きく貢献したのである。³²⁾

だが、越後長岡と言えば、司馬遼太郎『峠』（新潮社、一九六八年）の主人公として描かれた英雄は河井継之助（一八二七—一八六八）である。『峠』の主人公として描かれた河井は、三島億二郎や小林虎三郎とは幼児期からの親友であり、共に江戸に遊学して同じ佐久間象山の門人だった間柄である。だが、河井だけは、象山の信奉する「格物窮理」の合理主義思想である朱子学を嫌い、経世済民の実践第一を説く陽明学者である備中松山藩の山田方谷（一八〇五—一八七七）の教えを受ける。その河井が、戊辰戦争で敗戦を覚悟の上で官軍に正義の戦いを挑み、長岡城下は廢墟となる。皮肉なことに、この長岡復興を任されたのが小林と三島であった。象山を生涯の師と仰ぐ門下生二人の長岡復興に向けた活動は壮絶で、それは長岡再生への新たな戦いであった。滅びの戦いと再生の戦い。実に対照的であった。だが、その後の歴史では、敗戦を承知で正義のために戦った河井が英雄であり、戦後の郷土長岡の再生に尽力した三島や小林は歴史の表舞台からは忘却されてしまった。

時代が過ぎ、小林虎三郎が歴史の表舞台に登場するのは、山本有三の戯曲『米百俵』（新潮社、一九四三年）の美談

によつてである。長岡復興の主人公として描かれた虎三郎が、昭和の戦後に一躍、有名になつた美談。それは、終生の恩師であつた象山の「東洋道德・西洋芸術」思想を具現化した教育立国主義によつて、戊辰戦争で廢墟と化した郷土長岡の復興に献身した彼の多様な功績の中の一頁に過ぎず、彼の日本近代化に関する貢献は多岐に亘るものである。⁽³⁶⁾

象山は、殊の外、愛弟子である虎三郎の身を案じ、この後の同年四月に吉田松陰の海外密航事件に連座して捕縛され、伝馬町の獄中で書いた『省警録』や藤田東湖宛の書簡の中で、横濱開港の犠牲となつた彼のことを思い次のように記している。

・門人長岡の小林虎をして、その主侯に上書して大計(横濱開港)を開陳せしめ、又、之をして阿部閣老の親行する所を見て、為にその利害を論じ、時に困りて規諫することを得て挽回する所あらんことを欲す。並に皆行はず。小林生は此を以て主侯の譴を得て、遂に辞して国に歸れり。⁽³⁷⁾

・小林の事誠に氣の毒に存候。天下の御為自分の主家にも当時御役勤められ候て千載の不覚御座候ては如何と氣遣ひ候より種々奔走も致し候事にて候所、其事あしく候と申にて、つみ蒙り候て登院にはいさゝかきずに成り不申候所、牧野様御家の御不行届きは世にも広まり可申と窃に嘆かはしく存じ候。⁽³⁸⁾

Ⅲ. 門人吉田松陰の黒船密航事件の先駆性

黒船来航と吉田松陰の海外密航事件

実は、虎三郎に先んじて、横濱開港の師説を奉じ「浦賀に於ける米艦視察の報告に併せて一篇の意見書を藩庁に提

出」して処罰を受けた同じ象山門人がいた。長岡藩の三島億二郎（一八二五—一八九二）である。当時、老中海防掛で日米和親条約の応接掛であった長岡藩主の牧野忠雅から、「書生の身をもつて藩政を論議するのは不埒至極」との理由で、嘉永七年正月十九日、御目付役を解任され帰藩を命じられたのである³⁹。

虎三郎の親友である三島も象山塾で学問修業に励んでいたが、学問半ばで長岡に帰郷を命じられた不運の門人であった。しかしながら、長岡戊辰戦争で虎三郎と共に不戦論者であった三島もまた、敗戦後は虎三郎と共に長岡藩大参事に任じられ、長岡復興の藩政を委ねられた。虎三郎が「米百俵」の後に上京した後も、三島は長岡に留まり、長岡復興のために銀行・病院・学校（長岡洋学校、現在の県立長岡高等学校）・女紅場などを創設し、多くの殖産興業を手がけ近代長岡の再建に尽力した最大の功労者なのである。廃藩後の長岡藩の後始末や廃墟となった長岡の復興に尽力した三島も、虎三郎と同様、終生、象山を恩師として敬仰し、「東洋道德・西洋芸術」思想の躬行実践に挺身したのである⁴⁰。

年少の吉田松陰（一八三〇—一八五九）にとっては、長岡藩の三島も小林も、共に象山塾で学ぶ尊敬する先輩であり、殊更に親交の深い学友であった。三島や小林が、横浜開港という師説を奉じて青春の蹉跎を踏んだことは、忠義の烈士である松陰に大きな影響を与えた。その結果、松陰は、恩師の説く開国進取の具体策の目玉として主張していた海外留学を決断し実行しようとしたのである。

一般には知られていないが、松陰の海外密航には、それを決断し実行させる契機となる前奏があったのである。三島や小林が続いて海外密航を決断した門人松陰の知力と胆力に対する、恩師象山の評価は絶大なものであった。松陰の海外密航が失敗した直後、獄中にあつた象山は、信頼できる友人宛に松陰の人物評を次のように記している。

吉田生と申もの当年二十五歳の少年には候へ共、元來長州藩兵家の子にて漢書をも達者に誦下し胆力も之あり、文才も候てよく難苦に堪え候事は、生得の得手にて、海防の事には頗る思をなやまし萩藩兵制の事にも深く心を入れ存寄りの次第、書立て其筋へ申出候義も度々これ有り、小弟門下にも多くこれなき忠直義烈の士に御座候。

象山は、「当今にても辺備の急務は彼をよく知るより先なるはなく、彼を知るの方略は人才を選び彼の地方に遣し、形勢事情をまのあたり探索」させる海外留学が急務であることを、黒船来航の前々から主張し、優秀な人材の海外留学制度の実現を幕府に説いてきた。だが、彼の時代を先取りした開国進取の建策は聞き入れられることはなかった。横濱開港の師説を奉じて三島や小林が挫折した後、愛弟子の吉田松陰がペリー艦隊に乗船して米國に留学したいという国禁を犯す大胆な海外渡航計画を相談されたとき、象山は、これを是として大いに奨励した。象山は、松陰に金四兩の旅費と「之の靈骨有り」で始まる有名な五言漢詩の壮行詩を贈り、さらには米艦乗船後に、ペリーに渡す嘆願書も添削してあげ、「拙生夷船に投ずる書へ佐久間添削致し候」、松陰の勇敢な実行計画を激励した。決行は、時あたかも、日米和親条約の締結に、ペリー艦隊が再航していた嘉永七年（一八五四）三月二十七日の夜のことであった。松陰は、自分の門人である金子重之輔（一八三二—一八五五、長州藩）と二人で、下田港内の小島から漁船で旗艦ポーハタン号に漕ぎ寄り、米兵の制止を振り切つて乗船するのである。

だが、ペリー提督は、「幕府から許可を得たものでなければ応じられぬとして、彼らの乗艦を断つた」のである。米國への渡航を拒否され、小舟も流失してしまつた失意の二人は、米國側のボートで下田の海岸に送り返された。大志の夢敗れた二人は、小舟が見つければ分かることとして、潔く下田奉行所に自首して江戸に護送され、伝馬町の牢

屋敷に投獄されたのである。

開国進取の突破口となった松陰の海外密航事件

突如、軍艦に小舟で乗り寄せて米国行きを懇願した日本の青年。この若い日本の青年子弟の勇氣ある行動に感動したペリー提督は、冷静なドイツの哲学者カント (Immanuel Kant, 1724-1804) さえも動揺する出来事であろうと評価して、「哲学的安心立命の境にある非凡な標本」と絶賛し、次のように讃えている。

この事件は、同国の嚴重な法律を破らんとし、又知識を増すために生命をさへ賭さうとした二人の教養ある日本人の烈しい知識欲を示すもので、興味深いことである。日本人は疑いもなく研究好きな人民で、彼等の道德的並びに知識能力を増大する機会を喜んで迎へるのが常である。この不幸な二人の行動は、同国人の特質より出たものであったと信ずる。又人民の抱いている烈しい好奇心をこれ以上によく示すものはない。(中略) 日本人の志向がかくの如くであるとすれば、この興味ある国の前途は何と味のあるものであることか。又付言すれば、その前途は何と有望であることか。

ペリーは、松陰たち日本の青年が命がけて渡米を求めた勇氣ある行動を、日本の将来への希望と受け止め称賛したのである。この歴史的な事実は、松陰や象山は知る由がなく、今日に至るまで、意外と日本の幕末史における感動的な出来事として知られてはいない。

海外密航を慫慂し激励した象山も、前述の壮行の漢詩やペリー宛の嘆願書の添削などを証拠に、事件に連座した廉

で捕縛され、松陰と同じ江戸伝馬町の獄に入れられた。象山は、米国使節応接掛を兼務する江戸北町奉行の井戸対馬守(生年不詳—一八五八)の厳しい尋問を受けた。だが、象山は、「是迄の死法を守り、かれの所長を取らむすべをも知らず、かの形勢事情を探らむともせられ候はぬ様子誠に望みを失ひ申候」と、幕府の旧態依然とした保守政道を堂々と批判する。それ故に彼は、奉行所の裁判でも、鎖国はすでに死法であり、夷船が近海を跋扈する国家存亡の折に、海外事情を探究して祖国に尽力しようとした吉田松陰等の行動は、称賛に値する義挙であるとして、米国に漂流した漁師のジョン万次郎(一八二七—一八九八)の前例をあげて駁論し、あくまでも松陰の無罪を主張したのである。

時代と共に変わる俗法よりも、学問が探究する真理の方が価値がある。朱子学の説く格物窮理の実学を躬行実践してきた象山は、若くして「理」を最高善とする自らの主体的な価値観を形成し、「法と理と不幸にして兼ねるを得ざれば、すなわち法を棄てて理に従うものなり」と説く、徹底した合理主義者であった。

評定所の判決は、本来、密航は死罪であった。が、天下一等の著名な学者である象山を、幕府の老中首座の阿部正弘や川路聖謨(一八〇一—一八六八、幕臣・勘定奉行)、さらには藩士を象山塾に送り出している中津藩・土佐藩・長州藩・薩摩藩・佐賀藩など五十を超える藩主たちなど、象山を理解し援護する幕閣や諸大名も多く、結局、象山師弟の判決は、死罪を免れ無期の蟄居謹慎となった。以後の象山は、面壁九年の地元信州での蟄居生活(赦免の二年後に五十四歳で惨殺)、松陰も長州野山獄に幽囚生活(後に安政の大獄で斬首刑、二十九歳)、金子も長州岩倉獄で蟄居生活(獄中で病没、二十五歳)と、憂国烈士の象山師弟は、それぞれに己の壮志を貫いて非業の最期を遂げるのである。

実は、この不運な海外密航事件を契機に、奇しくもペリー提督が「同国の嚴重な法律を破らんとし」た事件として、その歴史的な意義を高く評したごとく、日本の幕府にも欧米先進国へ留学生を派遣するという国境を超えた学びの道が拓けてくるのである。

優秀な人材を海外に派遣して欧米先進文化を学ばせるといふ先駆的な出来事は、松陰の海外密航事件から六年後の安政七年（一八六〇）正月、幕府が日米修好通商条約の批准のために遣米使節団をアメリカへ派遣したことにはじまる。この派遣団で、門人で義弟の勝海舟が咸臨丸の艦長として渡米するのである。海舟の渡米が決まったとき、象山は、これを衷心から祝して、「彌利堅渡海御用被仰：万衆中御擢選にて非常之御用被仰候事本懐不過之賀候⁴⁹」との書簡を送る。この偉業は、象山宿願の実現であるとの論拠として、次の二点を指摘する。

①当年より十八年八ヶ月も前の天保十三年（一八四二）、当時、幕府の老中職にあった藩主真田幸貫宛の上書（海防八策⁵⁰）で、「西洋船大工の工学の士等被招呼、艦砲の学校を興し程⁵⁰」を建白したこと、

②当年より十一年前の嘉永二年（一八四九）五月、同じく藩主宛の上書で、象山は、「外蕃を馭するは外蕃の情を知り候より先務は無之、外蕃の情を知り候は外蕃の語に通ずるより先なるはなく候」と「蘭日辞典」の編纂刊行の重要性を建白したこと、⁵¹

叙上のように象山は、西洋知識を見聞できる海舟の渡米を、自分の長年の夢の実現と受け止めて喜び、その歴史的意義を強調して海舟を激励したのである。

海舟の方も、渡米の翌年の文久二年五月に帰朝すると、実際に米国で見聞した彼の国の政治制度や生活文化などの情報を、蟄居中の象山に詳細に書簡で報告している。⁵²

この後、本格的な欧米留学生の派遣が始まるのは、松陰密航事件から十年後、同じ幕末鎖国の時代のこと、幕府自身によるオランダへの留学生派遣であった。幕府は、生麦村事件が勃発する半年前の文久二年（一八六二）二月、西

洋近代科学を日本に導入するために、海軍研究生五名(内田恒次郎・榎本釜次郎・澤太郎左衛門・赤松大三郎・山口俊平)、医学研究生二名(伊東玄伯・林研海)・人文科学研究生二名(蕃書調所の西周・津田真道)を、オランダに留学生として派遣したのである。軍事研究の留學生が主流であったが、加えて医学研究や人文科学研究所の留學生が含まれたことは、西洋日新の學術技芸の全体を受容する契機となる、実に意義深い英断であった。

彼らは、オランダのライデン大学で各自の専門とする最新の西洋科学を修得して帰国する。その後の留學生たちは、各々の専門分野で留学成果を活かして開拓的な研究を推進し、近代日本の優秀な指導者となった。特に人文科学分野の西周(一八一九—一八九七、西洋哲学者)と象山門人である津田真道は、帰国後、哲学・法学・政治学などの諸分野に西洋學術の成果を紹介する著書を出版するなどして開拓的な業績を残し、人文社会科学の分野における日本の學術文化の近代化に多大な貢献をなした。⁵³⁾

さらに、幕府の留學生派遣の翌年の文久三年(一八六三)五月、長州藩は、独自に吉田松陰の門人である志道聞多(井上馨、一八三六—一九一五)・伊藤俊輔(博文、一八四一—一九〇九)・山尾庸三(一八三七—一九一七)・井上勝(一八四三—一九一〇)・遠藤謹助(一八三六—一八九三)の五名(長州五傑)をイギリスへ密航させ、ロンドン大学に学ばせる。だが、その翌年、長州に予期せぬ大事件が勃発する。長州藩が、文久三年(一八六三、下関事件)と元治元年(一八六四、馬関戦争)の二度、英米仏蘭の欧米四国連合艦隊と交戦して惨敗し降伏したのである。この戦争を機に、長州藩は尊皇攘夷から尊皇開国に急転回し、急ぎロンドンから帰国した伊藤博文や井上馨は、明治五年(一八七二)九月に新橋横濱間の鉄道を主導の政界で活躍する高位高官となった。また、工学系の井上勝は、明治五年(一八七二)九月に新橋横濱間の鉄道を全線開通させるなど日本の鉄道開業に貢献し、「日本の鉄道の父」と呼ばれた。遠藤謹助も、維新政府の官僚として大阪に造幣局を創設して長く局長を勤め、日本の造幣制度を整備して「近代日本造幣の開祖」とも評されたのである。

さらに山尾庸三もまた、伊藤博文と連携して工部省の設立に尽力し、伊藤の後継の工部卿となって日本の工業の発展に尽くした。なお、現在に続く大阪造幣局内の桜並木を一般公開する「桜の通り抜け」は、明治十六年（一八八三）、当時の局長だった遠藤の発案といわれている。⁵³

また、薩摩藩も、文久三年（一八六三）七月の薩英戦争で、西洋近代科学の成果である強烈な軍事力に圧倒され、鎖国攘夷から一転して開国進取に方向転換し、西洋化を進めるべく英国に寺島宗則（一八三二—一八九三）・五代友厚（一八三六—一八八五）・森有礼（一八四七—一八九九）などの秀才十五名を、幕府に内密でイギリスに留学生として派遣した。留学先は長州藩と同じロンドン大学で、留学生の専攻は陸海軍の測量学・文学・医学・化学などの諸学に及んだ。帰国後、森有礼は、初代文部大臣として近代教育制度の確立に尽力し、また明六社の設立や商法講習所（一橋大学の前身）の創設など、近代学校制度の確立に尽力した。さらに、寺島宗則は、参議兼外務卿となって政府の財政難から関税自主権の回復を図るべく諸外国との条約改正に尽力し、その後は文部卿、元老院議長、在アメリカ公使、枢密顧問官など国家枢要の要職を歴任した。そして、五代友厚も明治新政府の参与職外国事務掛となり、イギリス公使パークス事件など外交問題の処理に当たる。が、明治二年（一八六九）に下野して、大阪株式取引所（現・大阪証券取引所）、大阪商法会議所（現・大阪商工会議所）、大阪商業講習所（現・大阪市立大学）、大阪商船、阪堺鉄道（現・南海電気鉄道）などを創設し、野にあって大阪経済を組織化し再構築した。⁵⁴

世界の中の日本という世界史の視座から、幕末期日本の歴史の流れをみれば、松陰密航事件は、ペリー提督が「傲慢にして残忍な日本の法典によれば大きな罰であっても、吾々にとつては唯自由にして大いに好奇心の発露」と記したごとく、開国進取を説いて横浜開港を主張した象山が提唱し続けた、日本近代化に不可欠な人材育成のために優秀な人材を海外派遣して学ばせる留学制度への道を拓く礎石となった。松陰の海外密航事件は、当時にあつては国禁を

破る大罪ではあったが、維新时期以降の近代日本において海外留学は国家奨励の快挙となる人材育成の栄えある成功体験となった。さすれば、幕末期に名もなき下級武士の志した海外留学への決死の挑戦は、決して無謀な無駄花ではなく、日本近代化の歴史上、実に意義のある先駆的な大事件であったといえる。

日米和親条約に下田開港を明記

鎖国から開港に一大転換する日本が、米国側と開港する港や領事の駐在その他の問題を巡って、交渉は難航した。だが、最終的には両国間の主張の相違は、大方が日本側の妥協により合意に達し、嘉永七年（一八五四）三月三日、神奈川の応接所で「日米和親条約」（神奈川条約）が締結された。全十二条からなる内容で最も重要な点は、第二条「条約港の設定」であった。そこには、「下田（即時）と箱館（一年後）」を開港すると定められていた。この二港において、米国側は「薪水、食料、石炭、その他の必要な物資の給与」を受けられることができると明記されていた。¹⁵象山が、前途ある愛弟子たちの犠牲を払ってまで主張した横浜開港は残念ながら実現しなかった。だが、この後の安政五年（一八五八）の「日米修好通商条約」では、急転直下の起死回生で、下田開港は横浜開港に変更される。そのとき、象山の構想した国家百年の大計は実現するのである。

条約の締結が終了した後、ペリー艦隊は、江戸湾に入って品川沖まで巡航し、丹念に湾内調査を実施し、三月二十一日、小柴沖（現在の金沢区柴町にある小柴海岸の沖）を出港して下田に向かった。だが、象山の方は、三月二十七日、愛弟子の吉田松陰が下田に停泊中のペリーの米国艦隊に密航を願ひ出て拒絶されるという事件が起きる。前述した吉田松陰の海外密航事件である。¹⁶

日米和親条約の第十一条「領事の駐在についての規定」により、初代日本総領事に赴任したのがタウンゼント・ハ

リス(Townsend Harris, 一八〇四—一八七八)であった。安政三年(一八五六)七月二十一日、ハリスが乗船した船が伊豆の下田に入港し、翌二十二日、彼は下田奉行と会談する。ハリスは、下田の玉泉寺(曹洞宗の寺院)に領事館を構え、アメリカの東洋世界における貿易権益の確保を目的とした日米修好通商条約の締結という大統領密命を帯びて来日したのである。それ故に彼は、更なる通商条約の締結に向けて、日本の幕府側と幾度も交渉を重ねた。その結果、最終的には、安政五年(一八五八)四月二十三日に大老(幕政の最高責任職)に就任した井伊直弼(一八一五—一八六〇、彦根藩主)が、清朝中国に勃発したアヘン戦争(一八四〇—一八四二)やアロー戦争(一八五六—一八六〇、第二次アヘン戦争)の悲惨な戦争の二の舞になることを恐れて、従来の鎖国論者から開国論者に転じ、開国して積極的に外国との交易を推進することに決し、朝廷の勅許を得ずに、幕府倒壊の契機となる重大な「日米修好通商条約」の締結を決定するのである。

その条約は、一方的に米国側に有利な内容で、日本にとっては極めて不利不当な内容であった。日本側に関税自主権がなく、アメリカ側に領事裁判権を認めるという、巨大な軍事力を背景に欧米先進国が後進国に押し付けた不平等条約は、安政五年(一八五八)六月十九日、神奈川沖の小柴湾に停泊中の米艦ポーハタン号上で締結された。この関税自主権の放棄と領事裁判権の承認という不平等条約は、後々、日本が近代国家に発展する上で長く大きな障害となるものであった。しかも、その第三条には、先の日米和親条約に明記されていた下田に代わって、神奈川と函館の両港に加え、新たに長崎・新潟・兵庫を開港し、江戸・大坂で自由貿易(開市)を行うこと、しかもそれらの港には外国人の居留地を開設することが規定されていたのである。

おわりに

下田から横濱開港への転換とその功労者

ところで、ハリス起草の条約案文には、開港場として「下田」に替わり東海道の繁華な宿場町である「神奈川」と明記されていた。だが、象山と親交があり、日本側全権委員であった岩瀬忠震(たなか)(一八一八—一八六二)は、江戸に近い寒村の横濱開港を主張し、江戸を大阪にかわる全国的な商品流通の中心地とし、また外国文明の窓口として幕府の再建をはかるという積極的な横濱開港論を幕閣に開陳したのである。その結果、横濱開港で幕府の意見統一をみた日本側は、横濱開港案に反対する米國側のハリスを押し切つて、日米修好通商条約を締結した。それ故に、岩瀬もまた横濱開港の功労者なのである。

岩瀬の説得を受けた大老の井伊直弼をはじめとする幕閣は、神奈川開港による東海道沿岸の交通要路で人の往来繁華な神奈川宿の混乱を避けるべく、東海道からはずれた対岸にある半農半漁の寒村である横濱村(武蔵国久良岐郡)に新たな港を拓くことに決し、開港日を安政六年六月二日と決定したのである(下田港は横濱港の開港後に閉港)。この日本側の横濱開港案で、安政五年(一八五八)六月十九日、日米修好通商条約は締結されたのである。

これによつて、象山が、黒船来航のとき、真つ先に主張した横濱開港が実現するのである。なお、大老就任の当初は鎖国攘夷論者であつた井伊直弼は、開国と公益を主眼とする日米修好通商条約の締結を前にして、アロー号事件(一八五六一—一八六〇)で清國が英仏兩國に大敗したこと、またインドにおけるセポイの乱(英國の植民地支配に対するインドの民族的抵抗運動)の鎮圧(一八五七—一八五八)など、当時の日本を取りまく欧米中心の世界史的な潮流による



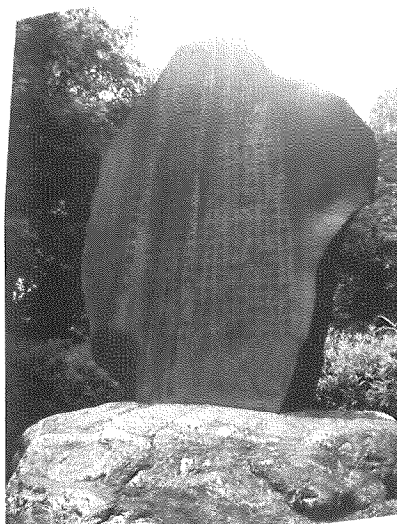
岩瀬忠震記念碑(横浜市の本覚寺境内、昭和57、1982年建立)

軍事的脅威を痛感して開国和平論者に転身し、天皇の勅許をえずに条約を締結する。日米修好通商条約の締結や安政の大獄などの強権政治を断行した彼の最期は、桜田門外の変(安政七年三月三日、一八六〇年)での悲惨なものであった。だが、結果として、条約の締結を決定し実行した彼も、横浜開港の実現に大きく寄与した歴史的偉人となったのである。

そのために、横浜開港の恩人として井伊直弼を顕彰すべく、明治四十二年(一九〇九)六月、横浜開港五〇周年の記念に、横浜市西区の掃部山公園かまゆやまに立派な立像が建立され、今なお国際港湾都市として発展し続ける横浜の港を見守っている。さらに、実際に条約交渉に当たり米国側が主張する神奈川開港の提案を退け、東海道に面した繁華な神奈川宿を避けて、その対岸にある反農半漁の寒村の横浜村に港を開くべきと主張して横浜開港案をまとめ上げ、それを実現させたのは、前述のごとく、幕府目付で外国奉行の岩瀬忠震であった。岩瀬をも横浜開港の恩人とも



井伊直弼立像



佐久間象山記念碑

横浜開港後の横浜市の人口推移				
当該年	人口	対前年比 増加数	対前年比 増加率	備考
元治元年(1869)	12,000人			イギリス領事調査
明治22年(1889)	121,985人			市政施行
明治34年(1901)	299,202人	94,096	45.9%	第一次市域拡張
大正8年(1919)	469,868人	23,771	5.3%	横浜開港50年
昭和2年(1927)	529,300人	117,800	28.6%	第三次市域拡張
昭和14年(1939)	866,200人	88,700	11.4%	第六次市域拡張
昭和44年(1969)	2,143,820人	96,333	4.7%	横浜開港100年
平成13年(2001)	3,461,690人	34,039	1.0%	21世紀開始年
平成31年(2019)	3,748,781人	8,609	0.2%	横浜開港160年
令和3(2021)	3,775,352人	-2,139	-0.06%	横浜開港163年

横浜市統計時系列データ（人口・世帯及び面積）（2021年10月1日現在）

る根拠である。それ故に、横浜郷土研究会有志により、遅ればせながら昭和五十七年（一九八二）、横浜市神奈川区の本覚寺山門の右脇に、岩瀬のレリーフ像をはじめ込んだ顕彰碑が建てられた。⁽⁶⁾

そして、黒船来航のときに、いち早く横浜開港を提唱し、その実現に奔走した佐久間象山に関しては、井伊直弼や岩瀬忠震よりも早く、明治二十三年（一八九〇）九月、横浜の伊勢山に「贈四位佐久間象山先生碑」が建立された。これは、前年の明治二十二年二月十一日、紀元節に際し朝廷より特使を以て象山に正四位が贈位されたことを受けて、横浜開港の恩人として横浜に「贈四位佐久間象山先生碑」（元帥陸軍大将・山県有朋題額、重野安繹撰）が建立されたのである。なお、その際には、門人で元老院議官の渡辺驥（一八三六—一八九六、大審院検事長・貴族院議員などを歴任）の主宰で祝賀会が挙行され、門人で元老院議官の加藤弘之（一八三六—一九一六、旧東京大学総理・元老院議官）・津田真道や知友の中村正直（一八三一—一八九一、東京大学教授、帝国学士会員）、高崎正風式部次官・渡辺国武大蔵次官・辻新次文部次官、そして弘化元年（一八四四）に蘭漢交換教授をした蘭学恩人の黒川良安、飯田藩出身の東京大学貢進生で森文部大臣秘書官となった中川元（一八五二—一九一三）など天下の名士である象山関係者一五〇余名が集った。⁽⁷⁾

さらに、昭和戦後の間もない二十九年（一九五四）には、横浜市議会の発案により横浜市西区の野毛山公園の高台に象山の記念碑が建立されたのである。

ところで、黒船来航当時の横浜は、現在の人口三七〇万人を超える日本第一の世界的港湾都市の姿からは、全く想像することができない。横浜は、神奈川宿と保土ヶ谷宿の中間に位置して東海道から外れ、湾内に突き出た半農半漁の寒村であった。開港から一六〇年余りが過ぎた今、驚異的な発展を遂げた横浜の歴史を省みると、幕末動乱の鎖国時代に開国和親を唱えて欧米文化の進取究明を図り、もって横浜港は日本の文明開化を推進する窓口となった。横浜

開港を実現させた政治家の井伊直弼、岩瀬忠震（たかなり）、そして開港を発想し実現に奔走した佐久間象山、彼らの先駆的な功績を無視することはできない。

ところで、横浜開港に関する歴史的偉人の評価を考える際には、佐久間象山・井伊直弼・岩瀬忠震の他に、別の功績者をあげる説がある。例えば、勝海舟の功績である。安政二年（一八五五）に海舟が作成した地図に、「神奈川宿と横浜村を結ぶ線上に、オランダ語で「船舶錨地」との記載があり、公的に表面化しない段階での、開港志向の人々の動き」があったことを、どのように解釈するか、という問題である。象山門人の海舟は、恩師が嘉永七年の日米親条約の締結前から下田開港を否定し横浜開港を最善とする情報を得ていたことは確かであり、「安政二年に海舟が恩師の横浜開港説を奉じて地図を作成した」と理解するのが妥当である。さすれば、やはり横浜開港を最初に唱えたという先駆性の故に、第一の功労者は、佐久間象山ということになる。彼は、アヘン戦争後の早い時期から開国を主張し、黒船来航のときには真っ先に下田開港を否とし横浜開港を是として、その実現に東奔西走した。紛れもなく最初に横浜開港を提唱したのは象山であった。

一体、何故に彼は、下田ではなく横浜の開港を主張したのか。その根拠は、前述したごとく、浦賀沖に浮かぶ未曾有の巨大な艦隊を具に観察したとき、日本が中国のように軍事的に圧倒され、不利不当な条約を締結させられる国家的な屈辱は、何としても回避しなければならない、という国家百年の大計を考えての兵学的な観点からであった。それ故に、当然のことながら象山の横浜開港の発想は、第一に軍事的な契機からであった。象山は、日米会談が行き詰まり、戦争になって黒船が艦砲射撃をはじめた場合の最悪の状況を想定して、西洋兵学者としての専門的な立場から防禦や反撃に有利な場所を考えた場合、外敵を排除し江戸を防禦するのに最適な港は、地政学からみて下田よりも横浜であると考えた。それ故に、米國艦隊を眼前に見て、東西兩洋の兵学に通じた象山の横浜開港の発想は、何より

も現実的な非常事態への対応策を想定した軍事的契機によるものであったことは当然のことである。

しかしながら、象山の場合は、軍事専門の兵学者である前に、格物窮理を基本原理とする真理探究型の洋学者であり、さらには平和社会（修身齋家治平天下）『大学』の実現を躬行実践する東洋の本格的な儒学者―朱子学者であった。その象山は、アヘン戦争を契機に洋学の世界をも学び、異なる二つの半円からなる東西両洋の地球を、一円統合して「東洋道德・西洋芸術」というグローバルな学術文化の思想を形成していた。そのような思想的な視座から、東西世界の戦争に精通した兵学者でもある象山は、「百戦百勝は善の善なる者に非ざるなり。戦わずして人の兵を屈するは善の善なる者なり」⁶⁵を信条としており、「戦わずして勝つ」（攘夷を超えた大攘夷）ための最善の策として鎖国日本の開国和親・進取究明・文明開化を説く平和主義者となったのである。

さらに彼は、横浜開港に際して、決して軍事的なメリットだけに囚われて横浜開港を判断したわけではなかった。彼は、東西両洋の自由な交流や交易を通じて、横浜が、日本が、平和裏に発展することを見越して、島国である日本の異国との交流・交易の重要な窓口として、横浜開港を国家的なメリットの観点から捉えていたのである。米国をはじめ英仏露などの先進列強諸国との条約締結の賛否に揺れる幕末期の危機的現実の渦中であって、一〇〇年後、二〇〇年後の日本を先駆して描出し、世界に開かれた日本近代化の窓口として横浜開港を発想し実現に尽力した歴史的な人物、それが横浜開港の先覚者と評される佐久間象山であった。

【注】

- (1) 岩波文庫版、金谷治訳注「孫子」、四一頁。
- (2) 象山思想「東洋道徳・西洋芸術」については、拙稿「日本近代化と『東洋道徳・西洋芸術』の思想―開国進取を説く象山思想の形成と展開」(平成国際大学『研究論集』第十五号、二〇一五年三月)を参照。
- (3) 麓慎一著『開国と条約締結』(吉川弘文館、二〇一四年、一九一―二二頁)を参照。
- (4) 奈良本辰也『佐久間象山』(清水書院、一九七五年、九六―九七頁)を参照。
- (5) 以下、幕末期の歴史的事実の年月日に関する表記は『近代日本総合年表』(岩波書店、一九六八年)に基づいている。
- (6) 信濃教育会編の増訂版『象山全集』(全五巻、信濃毎日新聞社、一九三四―一九三五年)の第四巻所収、嘉永六年二月十八日付「竹村金吾宛書簡」、二二六―二二七頁。以下、『象山全集』第〇巻と略記。
- (7) 前掲、麓慎一著『開国と条約締結』、三三―三四頁を参照。
- (8) 『象山全集』第四巻、嘉永六年五月十日付「真田志摩宛書簡」、一三四頁。
- (9) 同上、嘉永六年六月五日付「母宛書簡」、一四六頁。
- (10) 同上、嘉永六年六月六日付「望月主水宛書簡」、一五一頁。
- (11) 同上、嘉永六年六月六日付「望月主水宛書簡」、一五二頁。
- (12) 同上、嘉永六年六月六日付「望月主水宛書簡」、一五〇―一五一頁。
- (13) 同上、嘉永六年六月七日付「山寺源大夫宛書簡」、一六一―一六三頁。
- (14) 同上、嘉永六年六月六日付「望月主水宛書簡」、一四九―一五〇頁。
- (15) 前掲、麓慎一著『開国と条約締結』、二二頁を参照。
- (16) 同上、三四―三五頁を参照。
- (17) 岩波文庫版、『省營録』(一九四四年)、三八頁。象山著『省營録』の原文は『象山全集』第一巻に所収(全漢文)であるが、以下の本稿では飯島忠夫訳注の岩波文庫版を使用する。
- (18) 『象山全集』第二巻所収の「上書」、嘉永六年六月九日付、一二五―一二七頁。
- (19) 『ペリー日本遠征日記』(雄松堂出版、一九八五年、四五―五頁)には、象山が目視した黒船四艘の全長・トン数・乗員数・積載砲数・艦長名などの数値が記載されている。実際のペリー提督を司令官とするアメリカ合衆国極東艦隊(一八五三―一八五四)の旗艦サスケナ号をはじめとする所屬艦船の規模や装備の一覧は、『ペリー日本遠征日記』の四五―五七頁に

記載されている。

- (20) 『象山全集』第四卷、嘉永六年六月六日付「望月主水宛書簡」、一五〇―一五一頁を参照。
- (21) 同上、嘉永六年六月二十九付「小寺常之助書簡」、一五七頁。
- (22) 同上、嘉永五年十二月二十九付「松代藩留守居津田転より庄内侯への返簡」、一一一頁。
- (23) 前掲、麓慎一『開国と条約締結』、一一五頁を参照。
- (24) 同上、一一五頁を参照。
- (25) 『象山全集』第四卷、嘉永七年正月十一日付「望月主水宛書簡」、二二四頁。
- (26) 前掲、麓慎一『開国と条約締結』、一四一―一四二頁を参照。
- (27) 条約の全文は、前掲、麓慎一『開国と条約締結』、一四九―一五〇頁。英文のとその日本語対訳の全文は、『ペリー日本遠征随行記』(雄松堂出版、一九八〇年)、二五五―二五八頁に掲載。
- (28) 前掲、麓慎一『開国と条約締結』、一四三頁。
- (29) 同上、一四九―一五〇頁。
- (30) 『象山全集』第四卷、嘉永七年二月二十六日付「藤田東湖宛書簡」、二三三頁。
- (31) 同上、二三四頁。
- (32) 前掲、岩波文庫版『省警録』、四二頁。
- (33) 同上、四三頁。
- (34) 象山門人の小林虎三郎の思想と行動に関しては、拙著『小林虎三郎―日本近代化と佐久間象山門人の軌跡―』(学文社、二〇〇一年)及び『米百俵の歴史学』(学文社、二〇〇六年)を参照。
- (35) 同上の拙著『小林虎三郎―日本近代化と佐久間象山門人の軌跡―』『米百俵の歴史学』を参照。
- (36) 同上の拙著『小林虎三郎―日本近代化と佐久間象山門人の軌跡―』『米百俵の歴史学』を参照。
- (37) 前掲、岩波文庫版『省警録』、四三―四四頁。
- (38) 『象山全集』第四卷、嘉永七年二月二十六日付「藤田東湖宛書簡」、二三七―二三八頁。
- (39) 長岡藩の門人で虎三郎の親友である三島億二郎(一八二五―一八九二)。三島に関する詳細は今泉省三『三島億二郎伝』(覚張書店、一九五七年)を参照。
- (40) 長岡市史双書『三島億二郎日記』(全四冊、一九九一―二〇〇一年)を参照。

- (41) 『象山全集』第四卷、嘉永七年四月二十七日付「獄中より山寺源大夫三村晴山宛書簡」、二五五頁。
- (42) 同上、二五五頁。
- (43) 同上、二五八頁。
- (44) 『吉田松陰全集』(大和書房、一九七二年)第七卷、一三四頁。
- (45) 『ペリー日本遠征隨行記』(雄松堂出版、一九八〇年)、二八四頁。
- (46) 『ペリー提督日本遠征記』(雄松堂出版、一九八八年版)、下巻、七〇三頁。
- (47) 『象山全集』第四卷、安政元年四月二十七日付、「獄中山寺源大夫三村晴山宛書簡」、一二六五頁。
- (48) 神田阿玉ヶ池の象山書院時代、原漢文は『象山全集』第一卷「文稿雜」、一二七頁。
- (49) 『象山全集』第五卷、安政六年十二月十五日付「勝海舟宛書簡」、一六六頁。
- (50) 同上、「勝海舟宛書簡」、一六八頁。
- (51) 同上、「勝海舟宛書簡」、一六八頁。
- (52) 『象山全集』第五卷所収の文久二年八月二十日付「勝麟太郎宛書簡」。これ以降、頻繁に象山と海舟の往復書簡がなされたことが、『象山全集』第五卷に所収の多くの象山から海舟宛の書簡により判明。
- (53) 幕府のオランダ留學生派遣の留學生・オランダでの学習内容・帰国後の活動などに関しては、渡辺實著『近代日本海外留學生上』(講談社、一九七七年)、五九―七七頁を参照。
- (54) 長州藩のオランダ留學生派遣に関しては、同上、渡辺實著『近代日本海外留學生上』、一一―一四頁を参照。
- (55) 薩摩藩のオランダ留學生派遣に関しては、同上、渡辺實著『近代日本海外留學生上』、一一四―一八頁を参照。
- (56) 前掲、『ペリー提督日本遠征記』下巻、七〇五頁。
- (57) 前掲、麓慎一「開国と条約締結」、一四九―一五〇頁。
- (58) 前掲、『ペリー日本遠征隨行記』、二八八―二九〇頁にペリー側が記録した吉田松陰の米国密航事件の顛末が記載されている。
- (59) 昭和五七年(一九八二)、横浜市の本覚寺境内に「横浜開港の首唱者」の記念碑が建立された(開港一五〇周年記念『横浜歴史と文化』、二〇〇九年、一七八頁)。
- (60) 昭和六一年(一九八六年)には新城市川路の設楽家菩提寺である勝楽寺に「岩瀬肥後守忠震顯彰之碑」が建てられ、さらに平成二八年(二〇一六年)には新城市の設楽原歴史資料館に銅像が建立された。森篤男『横浜開港の恩人岩瀬忠震』(横浜歴史研究普及会、一九八〇年)を参照。

- (61) 象山の贈位、横浜伊勢山に記念碑の建立、祝賀会の参列者などに関しては、宮本仲『佐久間象山』（岩波書店、一九三二年、六五—一六五九頁）を参照。
- (62) 横浜市市民局刊『図説 横浜の歴史』、一九八九年、一八二頁。
- (63) 岩波文庫版『孫子』、二五頁。